

一ノ一、一代峯縁起
出典 日本思想体系二十 寺社縁起（岩波書店）

解説 修験道の成立展開に重要な役割を演じた大和の霊山である大峰、葛城、笠置の縁起を説いたもの。鎌倉初期かそれ以前に編纂されたものと思われる。笠置寺縁起にも本文の引用が見られる。

原文

仏子道賢、今号日蔵

夫以大倭国東北楞在高山、名曰一代峯、前後有信山、其中有禅僧数五百余人、是則非他人、弥勒観音化身也、爰役優婆塞金剛山行者、去以白鳳十二年夏四月廿二日、始攀（攀の誤字か）登此峯修行、生中之間第七度、抑今是行者昔大倭州聖人、今大唐国第三仙人金剛山法起菩薩、金剛界峯果曼荼羅金峯山大聖威徳天、蘇悉地峯一代峯笠置石屋補処弥勒慈尊、胎蔵界峯因曼荼羅、三部秘法峯如是矣、一代峯極事金峯山縁起被垂矣、今斯峯有仙宮六所、因茲上宮太子如法経五部於書写、一所安置造七重馬惱石塔其内給、其塔本有黒白石、不知其数、爰役行者至随喜意発信心、於笠置石屋兩部如法経書安置石中給、仍天人聖衆下所奉供養也、其供養于今不絶、彼金峯山是兜率天内院、今此一代笠置峯兜率天外院也、此峯一度修行輩者、必往生知足天得於極楽自在乎、全以不可有疑歟、其後於来去僅二百余歳耳、改今仏子道賢修行事生中之間第九度、今始以延喜八年秋八月十二日、笠置石屋挙（攀の誤字か）登五七日籠、其間三部秘法曼荼羅十二時勤修、其間得天人供養、天人告仏子言、此下有池、縦広四十里、池内満七宝池上有石像慈尊、僅四百余歳、若於此地至心如法修行者、必往生極楽世界、現在随所願与財宝乎、仏子問曰、此峯修行者、必除天魔難又心中各願為成就耶、天等答曰、此土来者生々世々在々処々之間、我等守護又其心中所願為成就云々、仏子弥発信我身皮剥、三部大法秘密曼荼羅奉図絵、以虚空蔵石屋竜穴中入小一里許、然間有石門、堂戸開見之、在大日宮殿、且思惟間持咒満三洛叉、爾時従宮殿内二人鬼神出来、問曰、汝何者耶、仏子答曰、日本国金峯山椿木寺住沙門道賢也、返問曰、君誰人、答云、我二人天童子也、仏子又問云、此土何所耶、二天答云、此土是兜率天外院也、因茲奉顕慈尊聖御躰云々、爰仏子弥致信、強於此所奉安置図絵三部大法曼荼羅已畢、此石屋出後、此峯修行給間、伴有仙宮、此内兩部大乘経読誦僧坐、聖人見之発随喜意摩首頂云、我人共兩部大乘転読云々、件伴峯西面滝上有石門也、僧云、我身雖有他国心常有三部峯云々、件僧者昔役行者第三仙人也、爰行者日蔵兩人、我等住此峯末代行者守護云々、当山是非此土地、但耆闍崛山戌亥角闕此土来也、其時他国高声童子常此山来、六人也、其間金峯山高声童子二人渡給、滝蔵一人、在今一人峯間、行者随意守護給、并成八大童子矣云々、

始延喜十六年五月十二日此縁起頭也

峯間宿所卅所云々

一、楊（十町字ウツタキ） 二、阿弥陀（十五丁峯） 三、西方（十八丁峯） 四、大般若（廿丁東） 五、国見（十丁西） 六、石本（卅丁東） 七、如法（六丁東） 八、岡本（八丁西） 九、辻、（廿丁西） 十、尾上（十六丁東西无水） 十一、手車（十丁） 十二、弥勒（十五丁） 十三、往生院（廿丁） 十四、堂本（廿五丁峯） 十五、最勝（五丁西） 十六、如意（十一丁東谷） 十七、法花（廿丁西） 十八、普賢（三丁西） 十九、金剛（十丁西） 廿、峯（十五丁東） 廿一、椿木（十丁西） 廿二、無量（廿丁西） 廿三、今御竹（廿丁西） 廿四、滝本（十丁西） 廿五、石上（十二丁東） 廿六、郷見（十丁東） 廿七、石屋室（廿丁東） 廿八、松本（十二丁西） 廿九、井本（十一丁東） 卅、長谷峯（十丁東）

但此峯雖有南北両山於南山者除之、其故者末代行者、不堪機根故也、其意起者、南山中有十余丈黒蛇、見人極悦、後成大鬼王、字冠（タケニアリ）、其峯頂十五町有池、色赤白也、黒白蛇其数不知云々

已上如本写了、慶政本

已上以行蓮公（源少納言信実孫）令書写之了

但文字尤不審須請他本交勘之耳

慶政本

読み下し文

仏子道賢 今日蔵と号す。

それ大倭国の東北の楞を以て高山あり。名を一代峯と曰ふ。前後に信山あり。その中に禅僧の數五百余人あり。これ則ち他人に非ず。弥勒・觀音の化身なり。

ここに役優婆塞は金剛山の行者なり。去る白鳳十二年の夏四月廿二日を以て、始めてこの峯に攀登し修行す。生中の間第七度（役行者は七度生を変えているといわれる）なり。そもそも今のこの行者は、昔は大倭州の聖人、今は大唐国の第三の仙人、金剛山の法起菩薩なり。金剛界峯、果曼荼羅、金峯山は大聖威徳天。蘇悉地峯、一代峯・笠置石屋は補処の弥勒慈尊。胎蔵界峯、因曼荼羅なり。三部の秘法の峯かくの如し。

一代峯の極めの事は金峯山縁起に垂れらる。今この峯に仙宮六所あり。これに因り、上宮太子、如法経五部を書写するに、一所に安置し、七重の馬悩（寶石の一種）の石塔を造りてそれに内め給ふ。その塔の本に黒白の石あり。その数を知らず。

ここに役行者、随喜の意を至して信心を発し、笠置石屋に於いて両部の如法経を書き、石中に安置し給ふ。仍つて天人聖衆下りて供養し奉る所なり。その供養今に絶えず。

かの金峯山はこれ兜卒天（将来仏となる菩薩が説法している浄土、現在は弥勒菩薩が説法している）の内院にして、今のこの一代笠置峯は兜率天の外院なり。この峯に一度修行する輩は、必ず知足天（兜卒天に同じ）に往生し極樂に於いて自在を得んか。全く以て疑ひあるべからざる

か。その後来たり去るに於いては、僅かに二百余歳なるのみ。改めて今、仏子道賢修行の事、生中の間第九度なり。今始めて延喜八年の秋八月十二日を以て、笠置石屋に攀登し五七日籠る。その間三部の秘法の曼荼羅を十二時（二晝夜）勤修す。その間天人の供養を得。

天人、仏子に告げて言はく、「この下に池あり。縦広四十里にして、池の内に七宝満ち、池上に石像の慈尊あり。僅かに四百余歳なり。もしこの地に於いて至心に法の如く修行せば、必ず極楽世界に往生し、現在は所願に随ひて財宝を与へんか」と。

仏子問ひて曰はく、「この峯に修行する者は、必ず天魔の難を除き、また心中のおの願ひを成就するや」と。

天等答へて曰はく、「この土に来たる者は生々世々在々処々の間、我等守護し、またその心中の所願を成就せん」と云々。

仏子いよいよ信を發し、我が身の皮を剥ぎ、三部の大法の秘密曼荼羅を図繪し奉り、以て虚空蔵の石屋の竜穴の中に小一里許り入る。

然る間、石門あり。堂の戸を開きてこれを見るに、大日の宮殿あり。且く思惟する間、持咒三洛叉（三十万遍）を満たす。その時、宮殿の内より二人の鬼神出で来たる。

問ひて曰はく、「汝は何者なるや」と。仏子答へて曰はく、「日本国金峯山の椿木寺に住む沙門道賢なり」と。返りて問ひて曰はく、「君は誰れ人なるや」と。答へて云はく、「我ら二人は天童子（童形を現じて仏法を守護する神）なり」と。仏子また問ひて云はく、「この土は何れの所なるや」と。二天答へて云はく、「この土はこれ兜率天の外院なり。これに因り慈尊の聖なる御躰を顕はし奉る」と云々。

ここに仏子いよいよ信を致し、強ちにこの所に於いて図繪の三部の大法の曼荼羅を安置し奉ること已に畢んぬ。

この石屋を出でて後、この峯に修行し給ふ間、伴に仙宮あり。この内に両部の大乘経を誦誦する僧坐す。聖人これを見て、随喜の意を發し首頂を摩して云はく、「我、人と共に両部の大乘を転読せん」と云々。件の伴峯の西面の滝の上に石門あるなり。

僧云はく、「我が身他国にありといへども、心は常に三部の峯（金峯山、笠置山、熊野の三山）にあり」と云々。

件の僧は昔の役行者、第三の仙人なり。ここに行者・日蔵の兩人、「我等、この峯に住みて末代の行者を守護せん」と云々。

当山はこれこの土の地に非ず。但し耆闍崛山（インドマガタ国の首都、王舎城の東北にある山、釈迦説法の聖地）の戊亥（西北）の角闕けて、この土に来たるなり。その時、他国の高声童子、常にこの山に来たるなり。六人なり。その間、金峯山の高声童子二人渡り給ふ。滝蔵に一人、今一人は峯間にあり。行者を随意に守護し給ふ。並びに八大童子と成ると云々。

始め延喜十六年（九一六年）五月十二日にこの縁起を顕はすなり。

峯間の宿所卅所と云々。

一、楊（十町、字ウツタキ）（以下略）。

但し、この峯（笠置山であろう）に南北両山ありといへども、南山に於いてはこれを除く。その故は末代の行者、機根（仏の教化を受ける者に備わる能力、素質）に堪へざる故なり。その意の起りは、南山の中に十余丈の黒き蛇あり。人を見て極めて悦ぶ。後に大鬼王と成る。字冠（タケニアリ）。その峯の頂より十五町に池あり。色は赤白なり。黒白の蛇その数を知らずと云々。

已上、本の如く写し了んぬ。慶政（注一）本なり。

注一、九条良経の子、一二六八年没

已上、行蓮公（源少納言信実の孫なり）を以てこれを書写せしめ了んぬ。

但し文字の尤も不審なるは、すべからく他本を請ひてこれを交勘すべきのみ

慶政本なり